ろを訪れていました。自然とお二人を招待することになり、その後の夕食会は私の家で行うことになりました。私は西田先生とお会いできて興奮していたのですが、自己紹介の後あまり会話が弾まなかったのは少し残念でした。（私は当時、伝統的な日本のエチケットについてあまり知らなかったので。）

そのような次第だったので、我々二人とも参加した次の国際会議のとき、私は少々驚いてしまいました。西田先生は私の興味と関連する論文の束を持って現れ、セントアンドリュースでの私の歓待にお礼をしてくれたのです！そのときの会話の中で、私は先生にマハレ山塊国立公園を訪問することは可能かと非常におずおずと尋ねたのですが、どうも部分的に誤解されたらしく、トシはなんとマハレでの調査許可をくださったのです！

今思うに、私は相当びっくりしましたが、とても嬉しかったのです。当時、私は一度も野生の類人猿を見たことがなく、一種の霊長類を研究した経験があるだけでした。その後アイデアを見つけるために二年間勤勉に勉強し、1984 年には妻のジェンとともにマハレでチンパンジーの発声行動について調査をすることができました。それはあまり成功したプロジェクトとはいえないかもしれませんが、その後の私の類人猿研究のキャリアに繋がっています。その意味で、トシにはとても感謝しています。もはやトシがあのときの誤解に気づいているのか知ることもできませんが、私たちは会議では頻繁に会い、そして良き友人であり続けました。彼の死は悲しい損失です。

（翻訳：浅井 健一郎）

西田さんとの思い出

ジョン・C・ミタニ
ミシガン大学

「私が直してみましょう。」そう言って私がカンシアナキャンプでホンダの発電機を分解し始めるのを、トシは怪訝そうにそしてとても用心深く見ていました。私はボルネオで同様の発電機を長年使用していたので、その修理方法を知っていました。私は素早く汚れを取り除き、直しました。後に、濱井美弥さんが教えてくれたのですが、私が想像していた以上に西田さんは心配されていたようです。どうやら、今西先生のグループがタンガニイカ湖畔において最初に野生チンパンジーの研究を行なったことで有名なカボコで、発電機が故障した際に伊谷先生が大変お困りになったという昔話があったようです。

おそらく、私が最初のマハレでの調査の際に発電機を直せたことで、トシは私を気に入ってくれたのだと思います。しかし、私は他にも理由があったと思っています。私たちはフィールドワークに対する変わることのない情熱を持っていて、お互いそのことを尊敬しあうようになっていました。そして、彼が私を信用するようになったのと同時に、私も彼を無条件に信用していました。振り返ってみると、中には信用すべきでないものもあったのかもしれません。彼が調査地で生のニワトリを食べると説得したときがそうでした。彼は大丈夫だと保障してくれましたが、日本で生食されるニワトリは特別に衛生的な方法で育てられています。しかし、私たちがその晩カンシアナで食べたニワトリが、日本と同じような方法でカシハの村で育てられたとは思えません！

結局のところ、私たちの友情は素晴らしいものでした。それは、トシが亡くなる前に私に送ってくれたメールの中にあった最後の言葉でした。そのときは、それが最後のやり取りになるとは思ってもいませんでしたが…。トシは、いつも弱みを見せることを嫌い、どれだけ苦しんでいるかを、決して私には見せませんでした。トシの強靭な性格、そして信用とお互いへの尊敬や賞賛の上に成り立っていたトシとの強い友情を、私は決して忘れません。トシを失い悲しみでいっぱいです。

（翻訳：井上 英治）

西田利貞氏の思い出

クレイグ・スタンフォード
南カリフォルニア大学

はじめて西田利貞氏に会ったのは 1991 年 10 月のことで、私がマハレ国立公園の調査キャンプを訪れた時のことでした。私たちは連絡を取り合って数ヶ月というころで、私がまだチンパンジー研究の世界では比較的新しい人間だったにも関わらず、彼は丁重に私を迎え入れてくれました。こうして私は、ゴンベでの調査後の休暇を、彼とともに一週間ほど過ごしたのでした。フィールドでの彼を知り、彼が長年訓練してきたアシスタントや学生と一緒に日々マハレのチンパンジーを追う彼について回ることは、本当に畏敬の念を起させる経験でした。ある雨の日に、土砂降りの中でチンパンジーたちがレイン・ダンスするのを座って見ていたのを思い出します。それはとても強い雨で、私たちが腰を下ろしている斜面が洗い流されてしまうのではないかと思うほどでした。西田博士がこの天候ではこれ以上観察できないと判断して、ようやく私たちがキャンプに帰ることになったころには、川は増水し、渡る際に脚が押し流されそうになっていました。彼とフィールドを共にする中で、私は彼が霊長類学を超えて様々な知識を持っていることを知りました。どのキノコがおいしくてどのキノコに毒があるのか、そして寿司にするにはタンガニイカ湖のどの魚がいいのか…。

2010 年の IPS 京都大会でも西田博士にご挨拶する機

会がありました。その時はご病気であることを知りませんでしたが。しかし、私の中でもっとも鮮明に思い出されるのは、2004 年に京都で開催された、彼の退官のときの最終講義とその後の祝賀会でした。幸いにも私は、海外から招待されたチンパンジー学者たちの一人でした。私たちはすばらしい歓迎を受けました。圧巻は何と言っても、なんとも多くの大学の学徒・同僚らが、西田博士に対して尊敬の念を向けていることでした。

私たちはこの学問分野の中でもっとも偉大な霊長類学者の一人を失いました。日本と西洋双方の次世代の動物行動学者たちに彼が果たした多大な貢献、そして彼が残した遺産に、私たちは感謝せずにはいられません。

（翻訳：坂巻 哲也）

西田さんの背中

五百部 裕
椙山女学園大学

今、9 年ぶりにマハレに来ている。私が最初にマハレに来たのは 1995 年。その時、西田さんと数か月をともにした。私は幸運なことに、3 人の優れたフィールドワーカーと調査をともにすることができた。学部学生時代には、トカラ列島の口之島で野生化ウシの調査を行い、伊谷さんの背中を見て歩くことができた。大学院生時代には、旧ザイール共和国のワンバで、ピグミーチンパンジーを追って加納さんと一緒に森を歩いた。そして、マハレでは西田さんと過ごした。3 人はそれぞれ違ったやり方でフィールドワークを行っていた。伊谷さんは調査中に俳句を作り、それを私に披露してくれた。加納さんは黙々と森を歩き、私はただ黙って彼の後姿を見ながら歩いていた。そして西田さんは、チンパンジーの食べ物を味見しては、それを記録していた。伊谷さんと加納さんがジェネラリストだったのに対して、西田さんはスペシャリストだったように思う。西田さんの関心は常にチンパンジーに向いていた。彼は、チンパンジーの目を通して彼らの住む環境を理解しようとしていたのではないだろうか。しかし、3 人に共通する点もある。それは彼らがフィールドではあまり語らず、私は彼らのあとをただ歩くだけでフィールド調査のなんたるかを学ばなければならなかったことだ。彼らの後姿を見ながら歩き、彼らのやり方を見て、フィールドで必要なことを感じていた。西田さんの後姿を追いかけることができたからこそ、マハレにおいて重要なことを理解することができたのだ。また一人、こうしたフィールドワーカーがいなくなってしまった。これは当然のことながら日本の霊長類学にとって大きな損失だ。もし可能なら今一度西田さんの後姿を見ながら、マハレを歩きたかった。まだまだ西田さんから学ばなければならないことはたくさんあるのだから。しかしそれも叶わぬ夢となってしまった。たぶん西田さんに対する供養として私ができることは、こうしたフィールドワーカーに私が一歩でも近づくことだろう。とても西田さんの域に達することはできないだろうが。

追悼文

中村 美穂
アニカプロダクション／京都大学野生動物研究センター

初めてお目にかかったのは大学 3 年の霊長類学の講義。早口についていくのが大変でした。志賀高原のニホンザル実習でフィールドワークの楽しさを教えていただきました。マハレでチンパンジーを探して道なき山を登った時、群れには会えませんでしたが先生は満足そうでした。初めての場所、新しい科学的知見、今までにない考え。いつも目を輝かせる永遠の青年でした。

ンクングウェの威容に見送られて

保坂 和彦
鎌倉女子大学

早いもので、大学院に進学した 1991 年の 8 月、西田さんに連れられて、マハレ山塊を訪れてから 20 年もの歳月が経過しました。

私のチンパンジー調査人生は、西田さんに金魚の糞のようについて歩いた 10 日間に始まりました。一人で個体追跡するようになってからも、追跡対象のオトナ雄同士が一緒に歩くことが多いため、結局、彼の背後に付き従うはめになりました。当時、私には親子ほど離れた彼に遠慮があり、緊張していました。おまけにあの早口に合わせて喋ろうにも舌の回転が追いつかず、苦労しました。